

火星が地球に数万年間に一回というような距離にまで接近し話題になっているが、火星について人間の最大の関心は生命の存在である。地下には水分が大量に存在しているようなので、細菌などの下等生命は十分に存在すると推定されているが、かつては人間に匹敵するような高等生物が存在していると期待されていた。

そのような期待の最初の契機は、十九世紀に活躍したイタリアの天文学者ジョバンニ・ヴィルジニオ・スキアパレリが発表した火星表面の地図である。そこには自然に形成されたのではないような多数の「スジ」があり、それを伊語で「カナリ」と名付けたのであるが、それが英語に翻訳されるときに「チャンネル」となり、火星には運河が存在し、それを建設できるような高等生物が存在しているという誤解に発展した。その誤解を拡大したのがアメリカの富豪の素人天文学者パーシバル・ローウェルで、自前の大望遠鏡で観測した結果を火星地図に集約したが、そこには火星全域を網羅する航空路線地図のような運河のネットワークが描写されていた。それは灌漑水路であり、それを建設できるような高度な技術をもつ高等な生命が存在すると主張し、巨大な頭部と細長い脚部のあるタコのような生物が想像される契機となった。二〇世紀初頭のことである。

このような時期に火星に関係する騒動がアメリカで発生した。やがて映画監督となるオーソン・ウェルズがCBSラジオの番組を制作していた一九三八年一月三〇日に、音楽番組を突然中断し、火星表面で異常爆発が観測されたという臨時ニュースから開始し、やがてアメリカの都市が火星から襲来した生物に攻撃されているという内容を放送したために、各地にパニック状態が発生し、百万人近い人々が避難するという事件になった。

これはウェルズの天才を証明する伝説であるとともに、当時のアメリカ国民の多数がラジオ放送という新規のメディアに不慣れであったために発生した事件であることを証明する事実でもある。長々と火星の観察の歴史の前置きをし、さらにラジオ放送番組にまつわる事件まで説明したのは、現在のIT社会にも類似の現象があるということを説明するためである。

インターネットを一般の人々が利用できるようになって十数年近くが経過したが、最近でも、この新規のメディアに関係する事件は続出している。強力なウイルスが世界規模で蔓延したり、電子取引での詐欺事件が頻出したり、風俗営業に新種の違法な商売が氾濫したりし、自殺を助長するような通信も交換されている。携帯電話でも、日本国内の一日一〇億回程度の通話のうち、九割が迷惑通話であるともいわれている。

このようなマイナスの側面が顕著であるから、インターネットや携帯電話を排除するという意見はない。それは便利さと不便さを比較して、社会が便利さを選択しているからである。ラジオ放送が上記のような騒動の原因となることによって抑制してくれば、情報社会の発展はなかった。あらゆる技術には正負の側面がある。そのマイナスの側面を技術が改善し、制度で排除し、そして人々が克服してきたのが人間の歴史である。

昨年八月から運用が開始された住民基本台帳ネットワークに根強い反対意見がある。指摘されるような情報漏洩や不正使用が皆無になることはない。しかし、そのわずかな危険以上に社会にもたらす便益が多いためであるから、六市町村を例外として三〇〇〇以上の地域社会は選択しているのである。技術の役割を冷静に判断することが必要である。